別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	後　川　知　美
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)

ヘンリー・ジェイムズの小説観と道徳意識

論文審査担当者(The Dissertation Committee)

主　　査(Name of the Committee Chair)		教　授	新田　玲子
審 査 委 員(Name of the Committee Member)		教　授	吉中　孝志
審 査 委 員(Name of the Committee Member)		教　授	今林　　修
審 査 委 員(Name of the Committee Member)		准教授	大地　真介
審 査 委 員(Name of the Committee Member)	大東文化大学	教　授	里見　繁美

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は、ヘンリー・ジェイムズが道徳性と芸術性を強く結びつけていた点に着目し、彼の作品の主題やその小説手法を分析しながら、作家ジェイムズの道徳意識を探り、彼が目指した小説がどのような芸術作品を目指していたかを論じたものである。

第一章では、ジェイムズの代表的作家論として、『ホーソーン論』が取り上げられている。そしてジェイムズがホーソーンの「地方性」を、アメリカ独自の色彩と礼賛する一方で、セイレムに深く根ざす地方限定的なものと批判し、国際的足場から賛否両論の評価を下していることについて、アメリカ文学独自の優れた芸術性を認めながらも、その評価が国際的には低いというジェイムズの嘆きや、独自の国際的見識でもって新しいアメリカ小説を目指そうとする文学的野心が読み取れると、後川氏は提言する。

第二章では、初期の『ロデリック・ハドソン』と「マダム・ド・モーヴ」を取り上げ、道徳意識が観察者の役割を通じてどのように伝えられてゆくかが分析される。後川氏は、このような観察者を通した道徳意識の描かれ方には、まだ荒削りではあるものの、後期作品の精緻な心理描写に通じるものが認められると考える。そして、そのより発展した形の心理描写がなされていることを、後期作品の『使者たち』の主人公、ストレザーにおける、禁欲主義と自由主義の、相矛盾した欲求によって生じる葛藤の分析をとおして立証する。後川氏はさらに、ストレザーの葛藤にはアメリカの繁栄に自信を得た後期作品ならではの作家姿勢が表されており、ジェイムズがアメリカの富の意味や、アメリカで美徳とされてきたピューリタン的道徳主義を、温故知新というおおらかな立場から見直していると主張する。

第三章では、初期作品の『アメリカ人』において、アメリカの英雄的人物像であるセルフメイド・マンがどのように扱われているか、検証される。主人公ニューマンは典型的なセルフメイド・マンとして描かれ、成功を追い求めるアメリカン・アイデンティティを再確認させるが、その一方で、金銭的な成功がすべてではないとする矛盾した行動も目につく。後川氏は、ジェイムズがこうした矛盾を肯定的に描くことで、人間の複雑さをより実感させる内面を描き出す一方、最終場面では、自己犠牲の精神的優位を明白にするというアメリカ的道徳意識を前面に押し出し、ピューリタニズム的道徳主義に立ち返っている点に着目する。

後川氏は、こうした初期の心理的葛藤が、後期作品の『鳩の翼』の主人公ミリーと富との扱いで繰り返され、さらに後期作品では富が善悪の二項対立を越えて機能していることを看破する。そしてそこに、19 世紀後半から 20 世紀へという、アメリカ資本主義が急速に発展してゆくなかで、アメリカの富に対するジェイムズ自身の姿勢の変化を重ねつつ、ジェイムズが国際的題材で最後に到達した新しい道徳性についての議論を膨らませる。

テキスト分析においてさらなる発展が望まれる箇所もあるが、非常に難解とされるジェイムズ作品を前期から後期に至るまで幅広く目配りし、時代の変化も考察しつつ、アメリカ的道徳性とヨーロッパ的芸術性との関係を丁寧に分析している点は高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)